

2021 年度 AA 研 “中東・イスラーム教育セミナー（第 17 回）

日時：2021 年 9 月 16 日（木）～19 日（日）

オンライン開催

「地域研究ということ一文書史・資料と“現地”の間を読む」

八尾師 誠（東京外国語大学名誉教授）

今回のセミナーは、普段の研究活動の大半を文書史・資料や関係文献の読み込みに費やしている皆さんを主として念頭に置いた報告であった。私自身も含め、そういう研究活動を送っておられる方々にとって、“現地”自体あるいは“現地”に関する画像資料（地図、写真など）が、文書史・資料や関係する文献を読み解く際に、如何に大きな助けとなるかを自らのささやかな体験を披露することで、認識を新たにしてもらう事が狙いであった。

立憲革命史研究に軸足を置き、イラン近現代史を中心に勉強を始めた私は、幸か不幸か、初めてのイラン留学を、1979 年 2 月に権力奪取に辿り着いた、いわゆるイスラーム革命の真ただ中に経験することとなった。そこで抱いた最大の疑問は、日本のみならず世界中のイラン研究者のほとんどが、何故、革命を予測できなかったのか、ということである。私自身、1978 年の 11 月末にイランに渡るに際して、既にイラン国内の状況はかなり怪しい雲行きになっていたこともあり、私の周辺のイラン研究者やイランウォッチャーに今後の状況の見通しを聞きまわったのであるが、革命のような究極の事態には絶対ならない、というのが判で押したような皆さんの返答であった。当時の本邦におけるイラン研究は、研究者層の厚みや研究蓄積の点ではまだまだ発展途上といってよい状況にあったが、世界の水準に比しても決して引けを取らない内容をもつ分野も中にはあった。そうした第一線で活躍する第一級の研究者にして、イランにおける革命の勃発など、思いもよらない事であったようだ。

イランの歴史や政治・経済、社会を専門とする研究者だけでなく、仮にイランの文学や美術、音楽などを専攻する者であっても、専門とする分野は、いずれも、イランの地に住み、そこでの生産活動を営々と繰り広げてきた人々の人間的行為の集積であり、結果であるはずだ。そうであるとするなら、自らの専門とする研究分野、或いは個別の研究テーマと密接にかかわる特定の地理的地点（特定の街であったり、特定の地方であったり、特定の国であったり、或いは中東のような広域であるかもしれないが）に住まう人々と、彼らが作り出した社会の有り様について、可能な限りの全体像を把握しておくことは、研究上、欠くべからざる必要条件となろう。私が考える「地域研究」とは、「歴史学」とか「政治学」あるいは「経済学」といったような諸ディシプリンと同じ土俵に乗る一つのディシプリンではなく、個々の研究テーマと、それが直接的に関わる特定の地理的地点との緊密な相関関係を自覚的に捉え返し、研究活動の中に位置づけようとする研究姿勢のことである。

以上の様な基本的観点から、イラン地域を例にとり、自然的諸条件からしても、社会的・歴史的背景からしても、我々が実際の研究活動の場としている日本とはいかに異なっているかについて、具体的事例を挙げながら指摘した。相異なる自然的条件の例としては、日本とは真逆の河川の一生（中流において一番水量が多く、下流に進むにしたがって水量が減り、最後は自然消滅をする、そして、ほとんどが海には注いでいない）、ジャングルに関するイメージの違い、「沙漠」理解の誤解などに触れ、また、社会的観点からは、日本では人口に膾炙している「遊牧民」という表現を、無前提にイランの歴史・社会に当て嵌めた場合に孕む問題を指摘した。つまり、本邦では「遊牧民」の対概念は「農耕民」であるが、イランの地において彼らの存在が歴史上大きな意味を持ったのは、「牧畜」を生業とするからではなく、「移動」を特徴としているからであった。因みに、イラン史の展開上、彼らと二項対立関係として位置づけられたのは「農耕民」ではなく、「定住民」であった。その中には農民だけではなく、都市住民も多く含まれていた。結論的には、彼らの存在を、「移動民」、より正確には、その特徴的な社会組織の在り方を考慮に入れて「移動部族民」と表象することによって初めて、イラン史の展開における彼らの役割と存在意義の解明に迫ることが出来ると考える。